

SDGs に対する生活者の意識と旅行 スウェーデン、ドイツ、日本 3カ国比較 (パート1)

JTB総合研究所 調査

JTB総合研究所は、「SDGsに対する生活者の意識と旅行(2022)」をスウェーデン、ドイツ、日本の3カ国比較の調査研究をまとめ、その結果を3月15日に発表した。ともに環境への意識が高く、「フライトシエム(飛び乗)運動の発端となったスウェーデン、国際観光支出額上位のドイツ、日本の比較を行った。

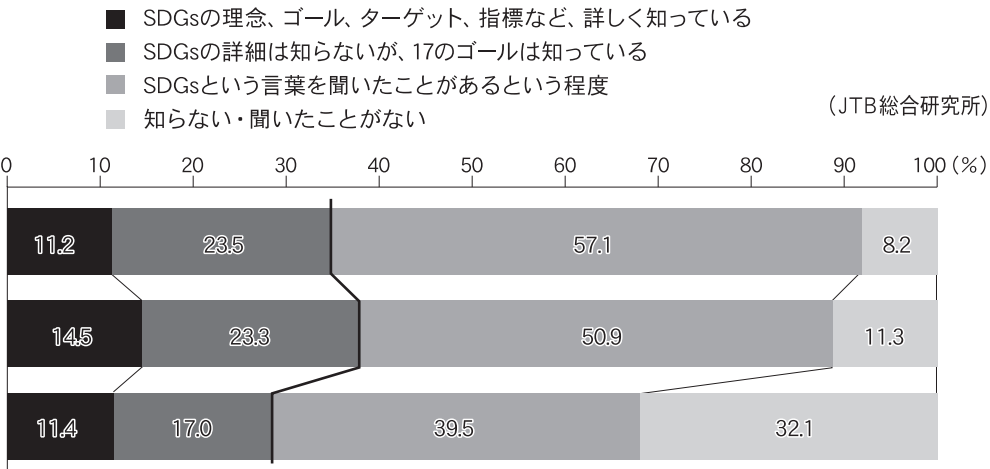
最初に、SDGsの認識の違いが表れた。重要性の認識度、旅行経験から、旅行・観光分野で重要だと思うスウェーデン、ドイツ、日本を最大五つまで選んでもらい、そのうち最重要と認めたものを一つ選んで、スウェーデン、ドイツ、日本が「貧困をなくそう」(1位)、「気候変動に具体的な対策を」(2位)、「海の豊かさを守ろう」(3位)、「陸の豊かさを守ろう」(4位)、「パートナーシップで目標を達成しよう」(5位)と、順位が異なることがわかった。

日本でのSDGsの認知度は、スウェーデンに次いで高く、詳しく知っている(11.2%)、21.7%の割合を知っている(32.9%)。一方、知らない(23.7%)の割合は34.7%だった。一方、知らない(23.7%)の割合は34.7%だった。一方、知らない(23.7%)の割合は34.7%だった。

SDGsに対する重要性の認識度は、日本は「とても重要だと思う」(21.0%)、「まあまあ重要だと思う」(46.5%)の合計が67.5%と最も低かった。日常生活でのSDGsを意識した行動の実践については、自己評価をしてもっとも高かったのは「気候変動に具体的な対策を」(4.7%)、「それなりに意識を持って実践している」(30.4%)の合計が35.1%と他国と比べて20%程度低かった。日本は一方、「まったく意識して実践していない」(20.5%)と他国と比較すると大幅に高い結果だった。日本におけるSDGsは、スウェーデンやドイツと比べて知識としての理解は進んでいると思われ、実際に意識を感じたり、意識した行動に移したりする人はまだ少ないと言える。

次に、SDGsの17のゴールのうち、日常生活の中で最も重要だと思うゴール(1)を選んでもらい、ドイツは「飢餓をゼロに」(22.6%)が最も高く、「気候変動に具体的な対策を」がスウェーデン(17.4%)と日本(17.3%)でも1位と2位の差がなかった。ドイツは「飢餓をゼロに」(22.6%)が最も高く、「気候変動に具体的な対策を」がスウェーデン(17.4%)と日本(17.3%)でも1位と2位の差がなかった。

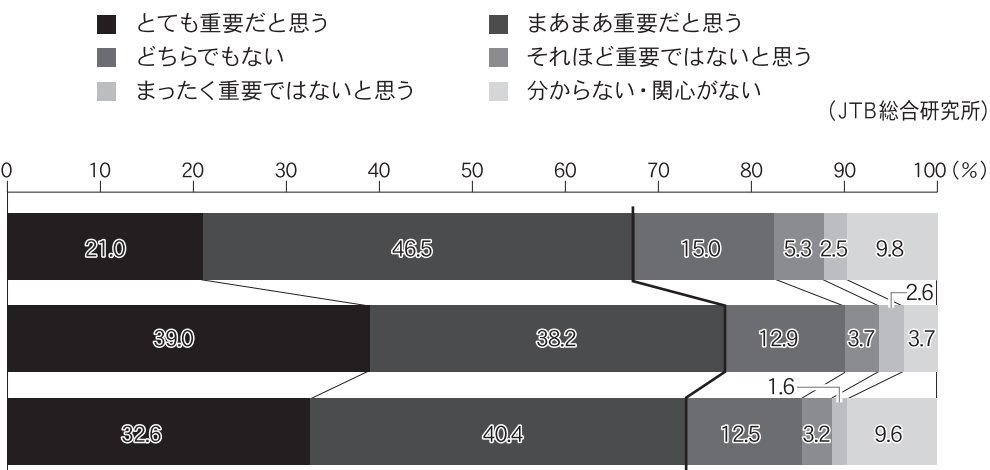
(図表1) SDGsの認知度(理念、ゴール、ターゲットなど)(単一回答)



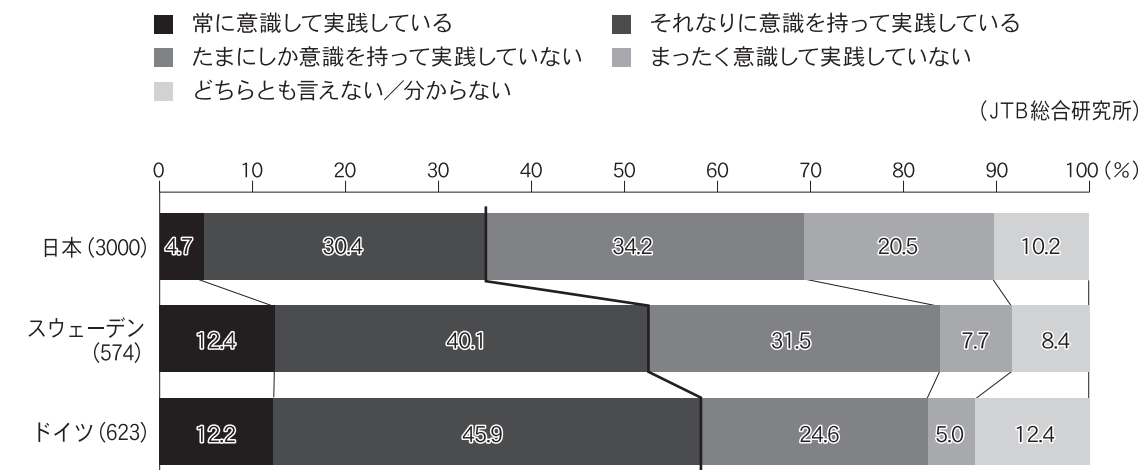
日本の最も重要なゴール 「気候変動に具体的な対策を」

数値自体は大きくはないが、旅行・観光の方が日常生活より重要なと感じる割合の高いゴールも

(図表2) SDGsに対する重要性についての意識(単一回答)

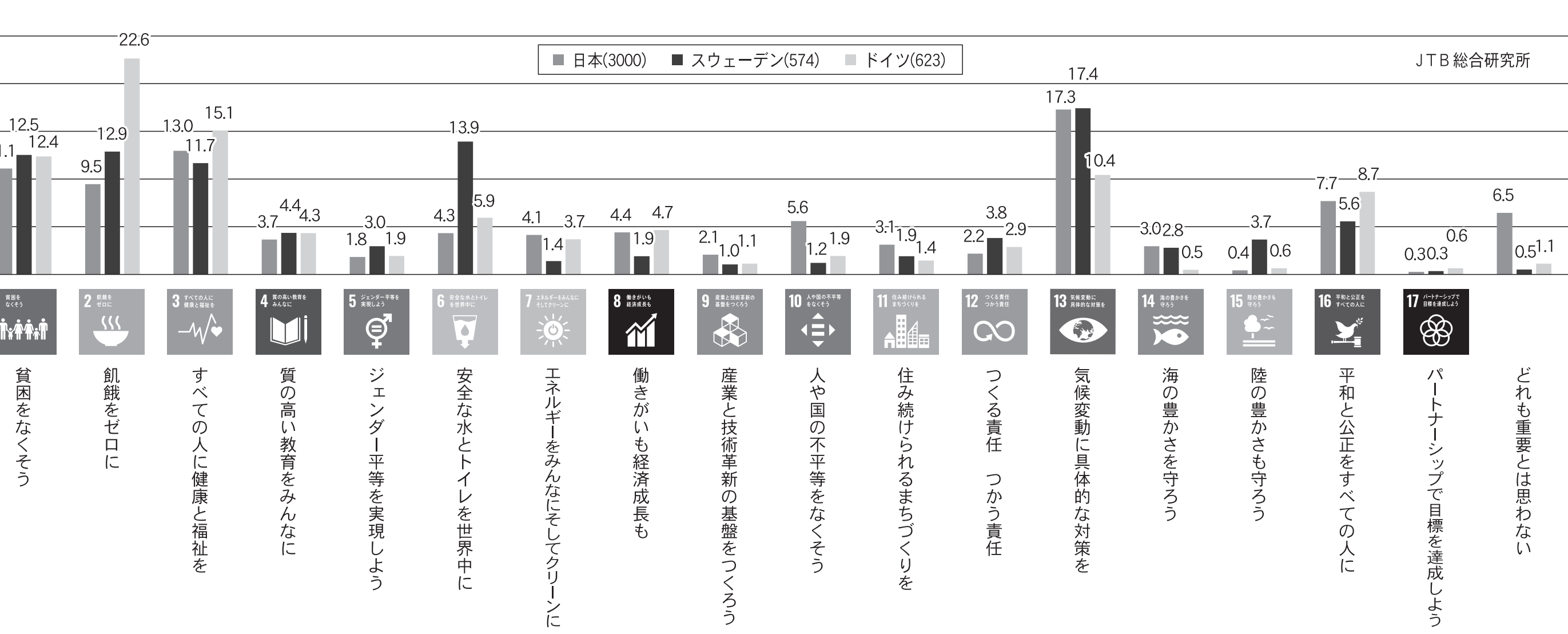


(図表3) 日常生活におけるSDGsを意識した行動(単一回答)



あった。3カ国共通で、「エネルギーをみんなに」と「陸の豊かさを守ろう」(同0.4%)、「同1」み続けられるまちづくりを」(4.4%)だった。スウェーデン、ドイツで「パートナーシップで目標を達成しよう」(同3.0%)、「国と比べて、観光資源の保護につながるゴールに」(同3.1%)、「産業と技術革新の基盤をつくろう」(同3.5%)、「水とトイレを世界中に」(同3.5%)、「日本は旅行者は他の2カ国と比べて、観光資源の保護につながるゴールに」(同3.1%)、「産業と技術革新の基盤をつくろう」(同3.5%)、「水とトイレを世界中に」(同3.5%)。

(図表4) 日常生活において最も重要だと考える17のゴール(国別)(複数回答)



(図表5) 旅行経験から考える、旅行・観光に最も重要だと考える17のゴール(国別)(単一回答)

